



# がんセンターたより

## 消化管内科の新体制と 最新診療状況について

消化器内科（消化管）部長  
高木 精一

消化器内科（消化管・内視鏡）では、消化管のがんの診断と内科的治療を行っています。本年の4月と6月に常勤医が1名ずつ増員となり、現在、7名の常勤医と1名のレジデントの態勢で、特に内視鏡治療と化学療法に力を入れています。また、内視鏡室が3部屋の稼働であったのが、6月より常時4部屋稼働できるようになり、内視鏡検査や治療が今まで以上に速やかにこなせる態勢となりました。

内視鏡治療：2010年1月より12月までの内視鏡治療の例数は、食道がん36例、胃がん164例、大腸腫瘍210例（悪性43例）でした。胃がんのESDに対し、当科にて考案した粘膜把持鉗子チャンネル付き透明フードを用いたESD（Fig.1）を取り入れています。その利点は、剥離面の粘膜下組織に確実なカウタートラクションをかけることができ、剥離粘膜面を直視下に観察することが容易となり、止血や血管処理を容易にし、また呼吸や拍動の影響を少なくし、安全な剥離操作が可能となります。現在、胃がんだけでなく食道がんや大腸がんに対するESDにも応用しています。また、2011年7月より高度先進医療として大腸ESDを開始しています。

化学療法：切除不能・再発胃がんに対しては、現在TS-1+CDDP療法が、標準治療とされています。また、2009年のASCOにて発表されたToGA試験の結果（生存期間中央値XP+ハーセプチン13.8か月vsXP11.1か月）より、HER2陽性胃がんに対してはXP（カペシタピン+シスプラチン）+ハーセプチンを使用することが標準治療と位置付けられています。当科では北里大学と共同で、DCS（ドセタキセル+シスプラチン+TS-1）療法を2006年より2008年まで臨床試験として行いました。その結果、奏効率は81.3%（95%CI,80.7-91.2%）、病勢コントロール率は98.3%で、無増悪生存期間中央値は8.7ヶ月（Fig.2）、治療成功期間中央値は6.5ヶ月、全生存期間中央値は18.5ヶ月、1年生存率は73.0%と非常に

いい成績でした。Grade 3以上の主要な有害事象は、好中球減少72.8%、貧血15.2%、発熱性好中球減少症13.5%、食欲低下6.7%、悪心・嘔吐5.1%、下痢5.1%で、認容性もあると判断しました。以上の結果より、当科ではDCS療法も切除不能・再発胃癌に対する有望な治療法と考えています。今後、DCS療法vsTS-1+CDDP療法の第Ⅲ相試験がJCOGにて開始される予定です。この他、切除不能・再発大腸がんに対する化学療法、食道がんに対する化学療法、化学放射線療法など、他科（大腸がんは、大腸外科・腫瘍内科と、食道がんは、食道外科・放射線腫瘍科）と連携を取りながら積極的に治療にあたっています。

患者さんがおられましたらご紹介ください。

図1 粘膜把持鉗子チャンネル付き透明フードを用いたESD

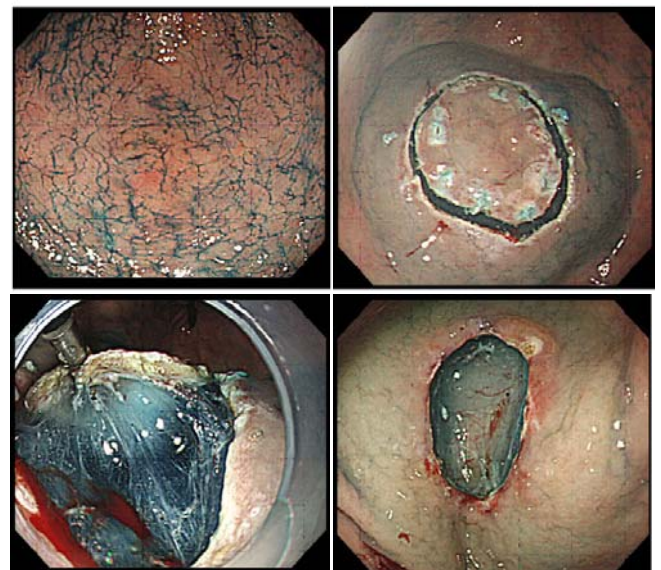
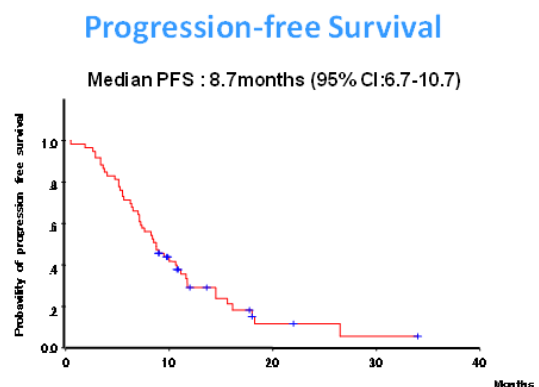


図2 無増悪生存期間



## CQI (Cancer Quality Initiater) 研究会について

医療の質評価推進 チームリーダー  
三浦 猛

CQI 研究会については、今回で2回目のがんセンターたより(今回は vol.47 平成23年2月)となります。

がんセンターの皆様には、『CQI』で何?と思われる方が大部分だと思います。これはCQI=Cancer Quality Initiater の頭文字をとったもので、簡単に言えば、がんの治療で、質の向上をめざして行きましょうという意味だと思って下さい。がん医療の質の向上をめざした全国CQI 研究会は、4年前の2007年12月に発足した全国規模の研究会組織です。千葉県がんセンターを中心に、神奈川県立がんセンター、愛知県がんセンター、四国がんセンター、栃木がんセンターの5施設でスタートし、その後岩手県立中央病院、今回から九州がんセンターも加わるようになりました。また去年から全国の地域がん診療連携拠点病院も自由参加することとなり、今年5月の会議では、都道府県がん診療連携拠点病院が9施設、それに地域がん診療連携拠点病院63施設が参加しています。

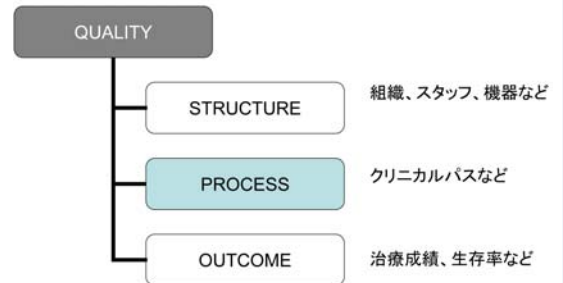
この研究会の特徴は、5大がん(胃がん、肺がん、大腸がん、乳がん、肝臓がん)を中心にDPCデータを元にした、各施設間のデータの比較を実名で行っているということです。日本ではこれまで、各施設間の治療方針、入院日数、抗生剤の使用、治療成績などの比較を実名で行うことがほとんど行われていなかったので画期的なことと考えています。今年は、5月に東京、10月に栃木で行われ、今後は毎年2回程度の開催で、2014年には神奈川県立がんセンターの新病院で開催予定です。データ分析は、グローバルヘルスコンサルティング・ジャパンというDPCデータ解析専門の会社が行っています。

皆様には、この全国のCQI 研究会のあと、院内CQI 研究会という名で、同様の内容を院内講演会という形で公開しています。これまでは主に医師を対象としていましたが、今後はがんセンターで働く皆様にも、神奈川県立がんセンターの現在の実力と、いかに質の高いがん医療を行っているかを知っていただく良い機会と考えられますので、是非参加をしていただきたいと思います。今年の6月に開かれた第5回院内CQI 研究会では、肺がんを坪井先生、大腸がんを塩澤先生、乳がんを千葉先生に解析してもらい、問題点についての検討を行いました。参加者は46名でまだまだ良く知られていない会ですが、これからもよろしく願います。がん医療の質の向上には、医師だけではなく、神奈

川県立がんセンターで共に働く皆様の力があって始めて得られるものです。次回の第7回院内CQI 研究会は、11月に大腸がんおよび乳がんについて、医療の質の評価(図-1)としてクリニカルパスを中心に検討を行う予定です。

図 - 1

### 医療の質の評価



これまでは院内にCQI 研究会の組織がありませんでしたが、去年4月、神奈川県立がんセンターが、地方独立行政法人神奈川県立病院機構になって、院内に新しく医療評価安全部という組織が作られ、その下部組織に、医療の質評価推進チームが作られました。その中にQI (Quality Index: 医療の質)研究会とCQI 研究会が作られました。DPCデータの分析だけでは、医療の質の向上にすでに限界があることがわかってきましたので、現在はがん登録のデータや外来のデータなども併用してより目的にあったデータにする努力を行っています。皆様の代表もメンバーとなっていただいています。定期的に会合を開き、神奈川県立がんセンターのがん医療の質の向上をめざして、日々努力をしています。少しずつその成果が現れてくるものと考えています。

### がんセンターホームページ リニューアルのお知らせ

平成23年9月26日より、ページデザインや情報分類などを大幅に見直し、ホームページを全面的にリニューアルしました。これに伴い、ホームページアドレスも変更致しましたので、以下のアドレスより新しいホームページにアクセスしてください。



新ホームページ アドレス  
<http://kcch.kanagawa-pho.jp/>

(企画調査室)



## 外科手術体験セミナー ブラック・ジャック・セミナー

夏休みも終盤に差し掛かった8月27日(土)ががんセンター講堂にて県内の中学生を対象とした外科手術体験セミナー「ブラック・ジャックセミナー」が開催されました。3回目の今年は、昨年までの名称「キッズセミナー」から一新し広報用ポスターや参加者向けの修了証などにブラック・ジャックが登場したり、当日会場に「ブラック・ジャック」の文庫本を配置したりとより外科手術をイメージできる体制を整えました。

また、今年度初の試みとして昨年度までのアンケートで要望の高かった看護師の仕事が体験できる「ナースのお仕事体験コーナー」を設置し、血圧計・聴診器体験、点滴のミキシングや滴下調整体験などを行いました。

当日は、午前の部27名、午後の部28名の生徒さんやその保護者、学校の先生、メディアの方など大勢来ていただきました。一番人気のあったのは、人体模型の上にセットされた鶏肉を使い超音波メスで実際の切れ具合が体験できる「最新医療機器(超音波メス)コーナー」で、ドラマで見るような手術模様が繰り広げられました。

参加した生徒さんは、自分が体験するときはもちろんのこと、他の人が体験しているのを見ているときや医師等が説明しているときも本当に真剣な顔をしており、積極的に質問している姿が印象的でした。

(事務局：総務課)



## 神奈川サイエンスサマー行事・科学教室 「染色体に触れてみよう」が開催されました

臨床研究所 主任研究員 菊地 慶司



昨今青少年の「理科離れ」が心配されていますが、それに対する取り組みとして神奈川県では毎年夏に県の試験研究機関、県内の博物館、科学館、大学、企業の研究機関で科学講座や体験教室などを通して若い世代に科学に親んでもらう企画「神奈川サイエンスサマー」を実施しています。今年度も昨年7月16日から8月31日の間に県内の129機関でさまざまな行事がおこなわれ、がんセンター臨床研究所においても8月24日に中・高校生を対象とした科学教室「染色体に触れてみよう」が開催されました。

人間はおよそ60兆個の細胞からできています。染色体はその細胞一個一個の中にあり、遺伝子の本体であるDNA(太さは100万分の1ミリですが、長さはおよそ2mにもなります)をコンパクトに格納し、DNAの遺伝情報を読み出している装置です。さらに染色体には細胞が2個に分裂して増えていく際にDNAを複製して2個の細胞に分配する役割もあります。このような役割を持つ染色体の異常は、がんの原因にもなっています。

参加者は中学生25人と高校生2人の27人でした。まず松隈章一研究員が染色体やDNAの構造や役割を講義し、続いて私が過去から現在に至るDNA研究の流れ(今後数年のうちに患者さんのがん細胞の全DNAを数分で読みとって異常を検出できるようになると期待されています)を紹介いたしました。加えて参加者には顕微鏡による細胞や染色体の観察、DNAの遺伝情報を解読するなどのクイズ、題目の「染色体に触れてみよう」の通り細胞からDNAを取り出す実験を通して染色体にかかわる科学を体感してもらいました。

その後のアンケートでは、参加者全員から「講義もよくわかって楽しかった」「講義は難しかったけれど実験が楽しかった」という感想をいただきました。これからもこのような行事を通して子供たちの生命科学への興味をはぐくみ、将来の医学を発展させる研究者を育てる役に立てばと私たちとしても実感した次第です。



神奈川県立がんセンター

第3回市民公開講座「がんを知る」

「大腸がん 肝臓がん」検査、治療の上手な受け方選び方  
- 最新事情を現場から -



日時：平成24年1月14日（土）13:00～16:30

会場：日石横浜ホール

募集人数：400名（応募多数の場合は抽選）

参加費：無料

応募方法：往復はがき又はFAX

住所、氏名、FAX番号を記載し、締め切り  
は12月26日（月）（当日消印有効）

応募先：〒241-8515（住所省略可）

神奈川県立がんセンター「がんを知る」宛

FAX：045-361-4692

問い合わせ先：総務課 電話：045-391-5761（代表）

# 緩和ケアチーム

緩和ケア認定看護師 山本 香奈恵

当センターには緩和ケアチームがあることをご存じ  
でしょうか。

当緩和ケアチームは「がんの早期から専門的緩和ケ  
アを行うことにより、がん患者及び家族の苦痛軽減並  
びに療養生活の質の向上を図る」ことを目的として  
2006年に設置されました。現在、緩和ケア内科医師3  
名、薬剤師2名、看護師1名がメンバーとして活動し  
ており、主治医から依頼のあった入院患者さんをも  
とをメンバーが訪問させて頂き、苦痛症状について検討  
した上でチームとしての提案をさせて頂いています。  
また、チーム依頼のあった患者さんが退院された場合  
は、外来でのフォローも行っています。

私は2005年に緩和ケア認定看護師となり、2010年6  
月よりチームの専従看護師になりました。チームへの  
依頼は難治性の苦痛症状が多いため、  
提案は医師からの薬剤介入が多くなり、  
医師・薬剤師はそれぞれの立場で判断  
していきます。その状況の中で看護師  
としての役割は何かということ意識  
しながら活動を始めました。

患者さんとの関係では、緩和ケアチームが患者さん  
のもとを訪問すると「私はもう死ぬの？」と言われる  
ことがあります。緩和という言葉が最期を連想させて  
しまうため、チームは病期にかかわらず症状緩和のた  
めに存在することをきちんとお伝えします。また、症  
状の変化により患者さんや家族の気持ちは揺れ動きま  
すが、その気持ちを理解した上で、納得した療養生活  
ができるよう確認しながら関わっています。  
スタッフとの関係では、主治医・病棟スタッフ・チ  
ームそれぞれの方針がずれないように直接会話し、確認  
することを心がけています。このように緩和ケアチ  
ームにおける看護師の役割は、患者さんがよりよい治療  
を選択して受けられ、外来・入院を問わず質の高いケア  
を受けることができるように調整していくことなので  
はないかと感じ、実践する日々です。



ボランティア会ランパスによる患者さんのための  
10・11月木曜ミニコンサート予定表

時間：PM1:30～2:00（30分前後）

10月6日	コーラス	サティ	フォー
10月13日	声楽	岡野雅代	
10月20日	声楽	植木朋子	
10月27日	声楽	本田武久	
11月3日	お休み		
11月10日	アンサンブル	マリエリカ	
11月17日	カンツオーネ	安井慶子	
11月24日	マリimba	能登弓子	

平成23年度5・6・7・8月

1日平均患者数

（単位：人）

区分	5月	6月	7月	8月
入院	283.2	301.1	296.6	298.4
外来	676.2	643.5	624.0	599.1

編

集後記

爽やかな季節に消化器内科では陣容もそろって速やかな対応が可能となり、緩和ケアチームでは患者さんの健康への不安に真摯に向き合っています。夏休みの「ブラックジャックセミナー」と「染色体に触れてみよう」は中高生の理科系知識欲をかきたてる絶好の機会でもあり、今年も新たな感動を随所に垣間見ることができました。（企画情報部長 野田）

編集・発行：神奈川県立がんセンター 企画調査室

〒241 0815 横浜市旭区中尾1-1-2

TEL 045-391-5761（内線2510）

<http://kcch.kanagawa-pho.jp/>